

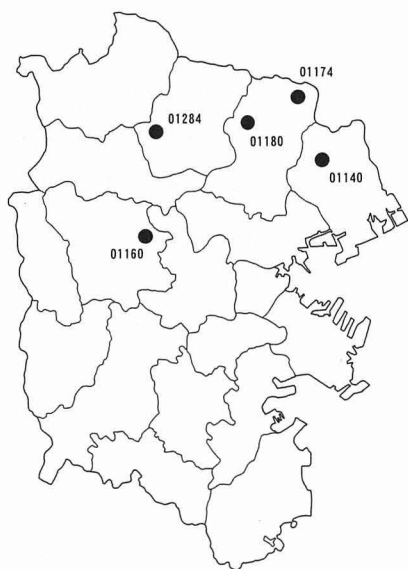
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（3）

ー通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介ー

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県立埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要10には横浜市域にあたる01140・01160・01174・01180・01284番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01174番：上田 薫、01284番：近野 正幸、01180番：須藤 智夫、01160番：谷 正秋、01140番：柏木 善治が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のことが多い。



- 01140 鶴見区三ツ池埴輪竪
- 01160 保土ヶ谷区上白根
- 01174 港北区内横穴墓
- 01180 港北区若雷神社遺跡
- 01284 和泉式土器

第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 01140 鶴見区三ツ池埴輪翳 横浜市鶴見区上末吉町

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

資料が収められていた封筒は県立博物館宛になっており、おそらくは神奈川県史 資料編20 考古資料に掲載するための調査に基づくことが考えられる。

[資料保管場所]

石川武靖氏蔵と記載される。横浜市港北ニュータウン調査団1986『古代の横浜』には、熊野郷土博物館蔵とされる。

[記載内容概略]

収められていた封筒には写真2枚（2セットでつごう4枚）と図面2枚あり。

封筒には「横浜市鶴見区上末吉町下末吉町との境 三ツ池付近（土師こしき）（ハニワさしば）」と記載される。

①写真

撮影経緯等の記述は特にないが、翳表裏面の写真がある。

キャプションは「横浜市鶴見区上末吉町三ツ池付近出土埴輪 石川武靖氏蔵」と記載。

②図面

A. 翳形埴輪は表面のみ図化されている。

キャプションは「横浜市鶴見区上末吉町三ツ池出土埴輪サシバ断欠 石川武靖 蔵」と記載。

B. 甗は実測がされ、脇にサイズが記されている（下8.4、上22.0、高22.0）。

キャプションは「土師器こしき 横浜市鶴見区上末吉町下末吉町との境三ツ池付近 石川武靖 蔵」と記載。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

翳形埴輪の出土をめぐる

研究紀要10 掲載の「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（2）」にて、大倉山公園内古墳出土とされていた埴の整理がされている。一文を紹介すると、“大倉山公園内古墳については、その詳細を報告した資料はなく、どのようなものであったのかは判然としない”とされ、1986「16. 鶴見川流域の埴輪」『古代の横浜』では、“寄贈された埴輪として堂の前古墳出土で紹介されているが、編集時には今回の赤星ノートの存在は知られていなかった。石川正人氏は熊野神社他、周辺一帯の神社の代表者。堂の前古墳の埴輪は、先代（石川武靖氏？）の時に地元の稲葉氏が採取したものが寄贈されて神社で保管している”とされる。“大倉山古墳出土の場合はどのような経緯で熊野神社が保管することになったのかという疑問が残る、どちらの古墳出土であるか判断することは現段階では難しい”と報告している（植山：2005）。

今回の翳に関しても同様のことが言える。翳の出土は横浜市鶴見区上末吉町下末吉町との境三ツ池付近出土とされ、県史にも三ツ池付近古墳としての紹介されている。しかし、三ツ池付近古墳は上末吉町とされるが、この古墳にかかる詳細を報告した資料はないものと思われる。翳は1986『古代の横浜』、2001『横浜の古墳と副葬品』にて堂の前古墳の埴輪として紹介されている。堂の前古墳は鶴見区駒岡町1559他に所在し、台地上に築かれた円墳（現在は25mの前方後円墳とも理解される）と遺跡台帳に登録されている。また、堂

の前古墳がある舌状台地上には、隣接して他にもう一基の古墳が同地番で登録されている。同地番で登録されている古墳は台帳では未確認とされており、古墳か否かの判断にも迷うところではあるが、堂の前古墳と三ツ池付近古墳では所在上の相違がある。これらからは、先の畧と同じく出土地が記録されていない以上確定することが困難な状況といえる。

翳形埴輪の特徴

形象埴輪のうち、行列具となる翳は、現在のところ管見の限り神奈川県内で唯一の存在である。神奈川に限らずとも出土する資料は少なく、その形態も多岐にわたる。本資料は、高さ約38cmが遺存しており、正面観は隅円方形の扇部分となり、やや反りを持つようである。中心には穿孔がされ、その縁取りとして隆帯の縁に粘土粒によるボタン状の添付があらわれる（遺存は15個）。中心より外縁に向けては、ややシンメトリーさには欠けるものの、放射状の沈線が施され、外縁の隆帯上にはやはりボタン状の添付がされる（遺存は7個）。周りの突起はほとんどが失われているようであるが、突起基部のみ断片的に遺存する。下部へは鋸歯状に粘土紐が隆帯として貼り付けられ、その端部にはボタン状の添付がされる。裏面は加飾されないが、大きな扇部分を支えるべく、V字状に粘土紐による補強がされる。装飾性豊かな優品であり、写真から見受けられる遺存状態も良好である。セット関係等の課題は残るものの、およそ6世紀後半という位置づけがされるであろうか。

甗

埴輪の翳と共に発見されたか否かは定かではないが、翳と同様に、横浜市鶴見区上末吉町下末吉町との境、三ツ池付近とされる。

土器による甗は、古墳時代後期として出土する例が比較的多いが、それらは頸部が屈曲し体部は縦方向のケズリ調整が一般的にされる。なかには輪積みの痕跡を意図せずに残すものもあるが、ほとんどはケズリ調整により表面では観察されない。三ツ池付近出土とされる本資料は、口縁部が複合口縁状をなし、器壁が厚めとなり、後期の資料に比してやや「ぼつてり」とした印象となる。頸部の屈曲は無く、口縁部は横方向にハケ調整（メモ書きにはクシ目とされている）がされ、内面も同様に横位または斜位のハケ調整がされる。また、ワズミあととのメモ書きもされ、外面はケズリ調整では無いことが伺えると共に、表面の摩滅も想定されるものである。このような特徴を持つ甗は、古墳時代前期後半～中期としての位置づけが考えられるであろうか。

この期の甗を出土する遺跡はやや距離を画するものの、青葉区上谷本第二遺跡A地区、神奈川区三枚町遺跡などがあげられる。上谷本A地区3号址出土の甗は、複合口縁状となる口縁部や器厚から受ける印象、調整の方法などが似通うもので、土器以外にも琴柱形石製品の出土などが知られる。三枚町遺跡では3号・34号住居で出土している。口縁部はヨコナデにより仕上げられるものが多く、体部は縦ナデとの観察がされるなど、形態は類すものの調整方法が異なるものである。土器以外では3号住居から滑石製模造品が出土している。三ツ池付近出土の甗は、前者により近い存在として捉えられるであろう。

鶴見区内の古墳時代の集落址は、梶山遺跡や上台北遺跡（上末吉町）、獅子ヶ谷遺跡や大池谷遺跡（獅子ヶ谷町）などがあり、区内の北西半である鶴見川の南西岸に点在する。前期から後期までの住居の存在が記されるが、調査された遺構数としては少ないと言えるであろう。このうち、三ツ池付近といえるのは梶山遺跡や上台北遺跡であり、梶山遺跡では滑石製模造品の出土も知られ、Ⅲ区の4号住居が中期に帰属する。これら状況からは、この甗の出土場所は定かではないながら、本来的には周辺に点在する住居などの遺構に伴

っていたものが発見されたとする位置づけも可能であろう。

遺構・遺物概要の引用・参考文献

1971 中央大学考古学研究会『横浜市緑区上谷本町 上谷本第二遺跡A地区・B地区発掘調査概報』

1982 鶴見区史編集委員会『鶴見区史』

1988 県営三枚町団地予定地内遺跡発掘調査団『横浜市 三枚町遺跡発掘調査報告書』

2004 横浜市教育委員会『横浜市文化財地図』

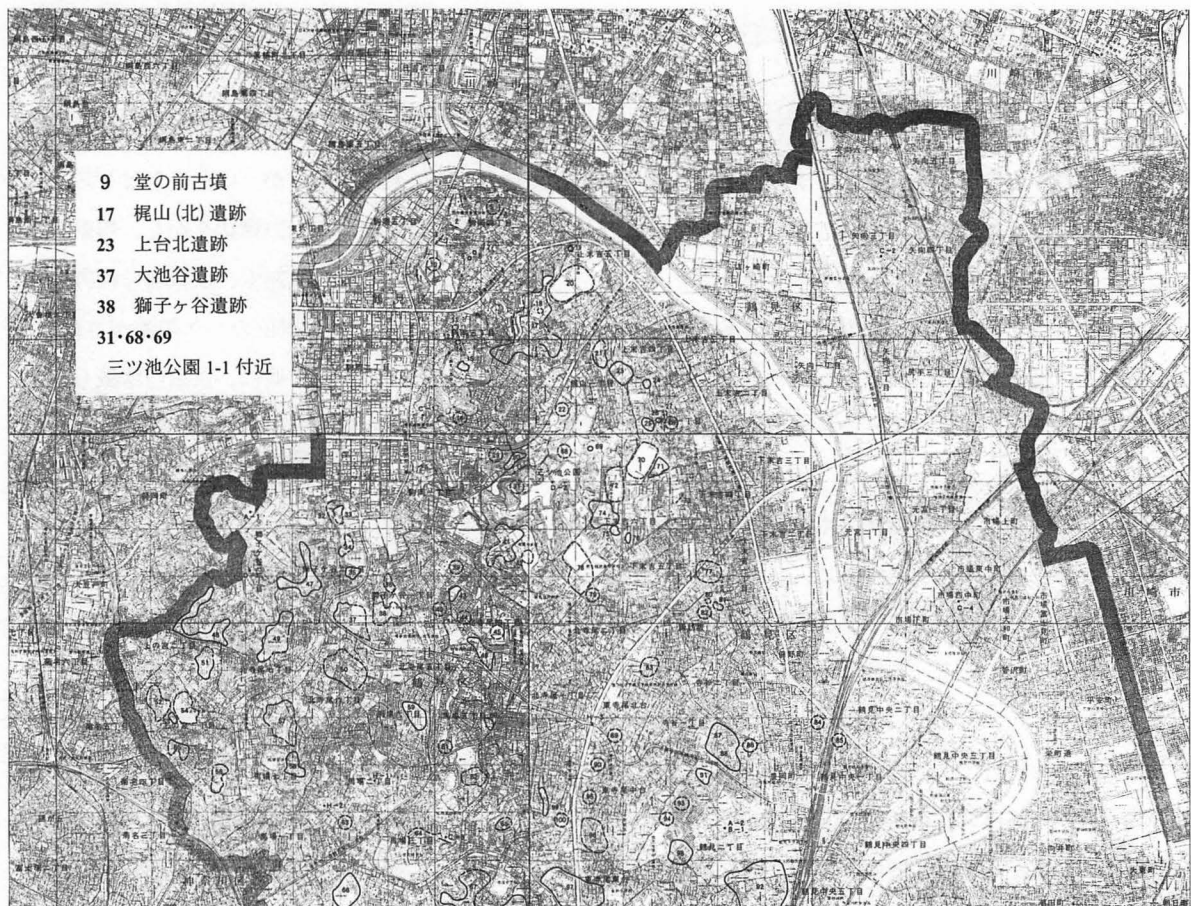
[掲載図書] 翳形埴輪

A：神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20 考古資料

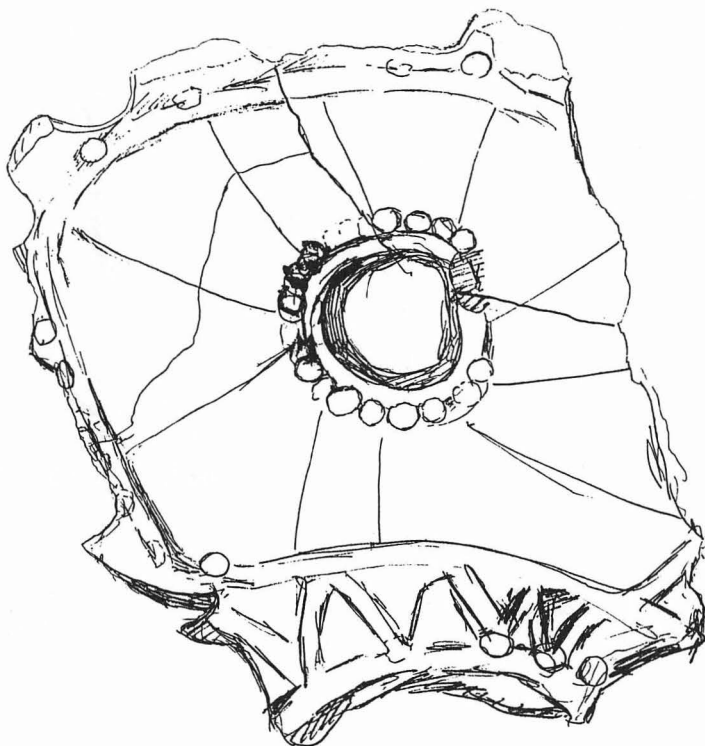
B：横浜市港北ニュータウン調査団1986『古代の横浜』

C：横浜市歴史博物館2001『横浜の古墳と副葬品』横浜市歴史博物館 企画展

[掲載図書概略] A：図版720に翳の写真が掲載される（表面のみ）。この時期では、県史にのみ掲載されているので、このために撮影したものと考えられる。県史（遺跡解説P210）では、「三ツ池付近古墳とのみにて詳細不明。埴輪さしば断欠出土。周りの突起は多く失われ、扇状部分だけが残るもの。石川正人蔵。本県下出土「さしば」は他に例がないので記録しておく」とされる。B：鶴見川流域の埴輪（P126）、C：様々な埴輪（P40）との項目に、駒岡堂の前古墳出土の埴輪として紹介される。（柏 木）



第2図 三ツ池付近遺跡位置図



第3図 三ツ池付近出土翳形埴輪 (S=約1/4)

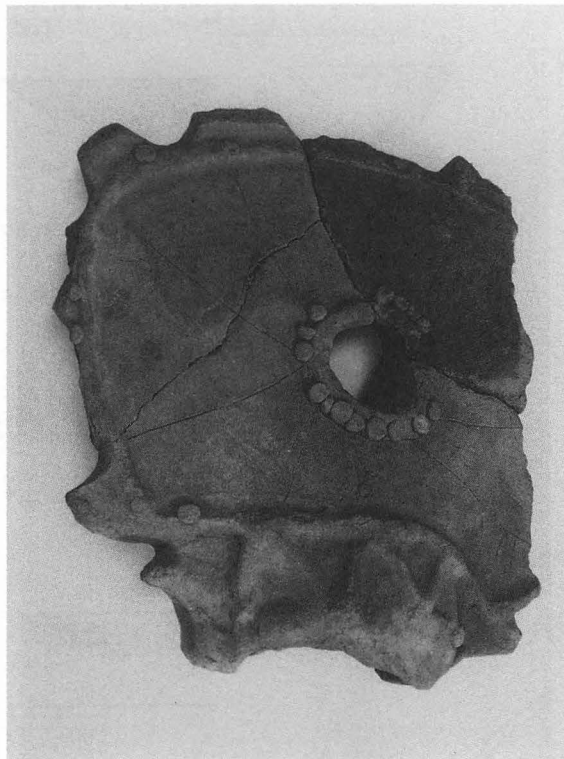
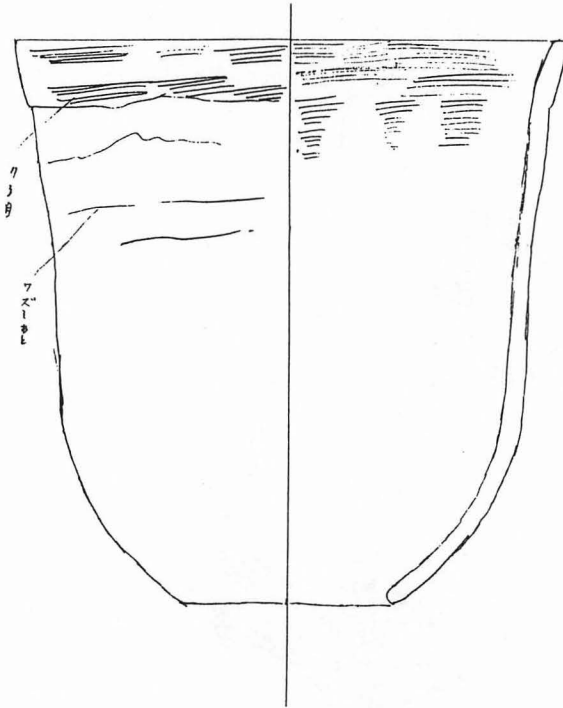


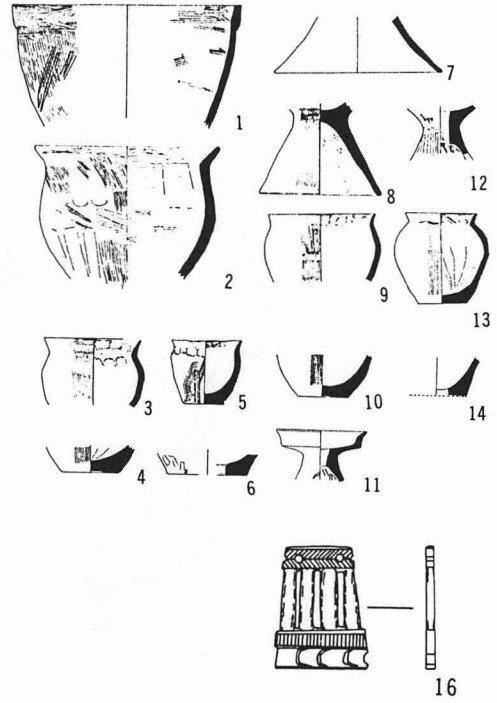
写真1 翳形埴輪 (表面)



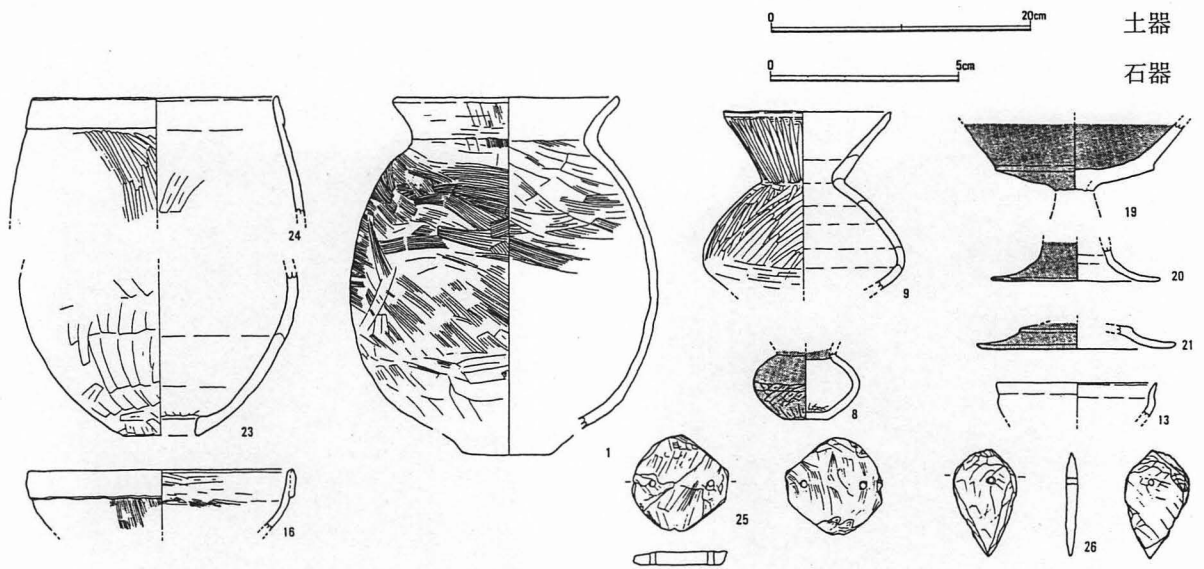
写真2 翳形埴輪 (裏面)



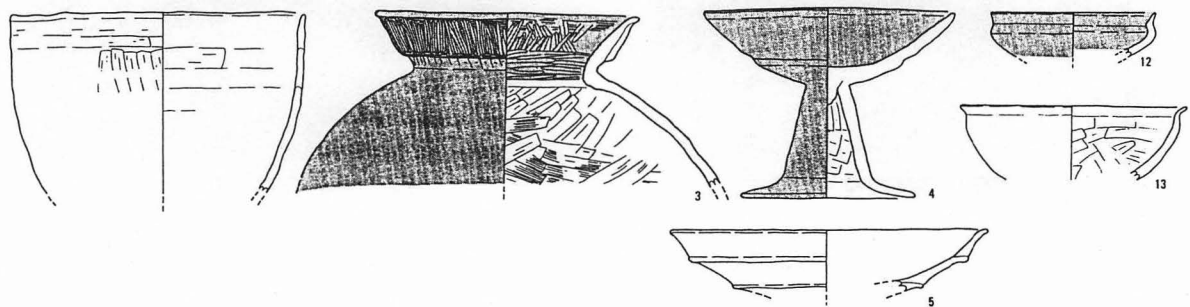
第4図 三ツ池付近出土土甕 (S=約1/3)



第5図 上谷本第二遺跡A-3号址



第6図 三枚町遺跡3号住



第7図 三枚町遺跡34号住

年報番号 01160 保土ヶ谷区上白根 横浜市旭区白根 2-8-1

1. 赤星ノートの内容

〔調査(踏査)年月〕 不明

〔資料保管場所〕 横浜市埋蔵文化財センター 蔵

〔記載内容概略〕 土師器の簡略なスケッチとメモ(第8図)。古墳時代前期の器台で、口径7.5cm、脚径10.5cm、高さ8.0~8.2cm。脚部に3孔あり。口縁部外面にはヨコナデが、受部外面にはヘラナデが、脚部外面にはタテミガキが、脚部内面にはナナメハケが、それぞれ施されている。保土ヶ谷区上白根(白根ゴミ処理場東北端)出土、千貝氏蔵とのこと。

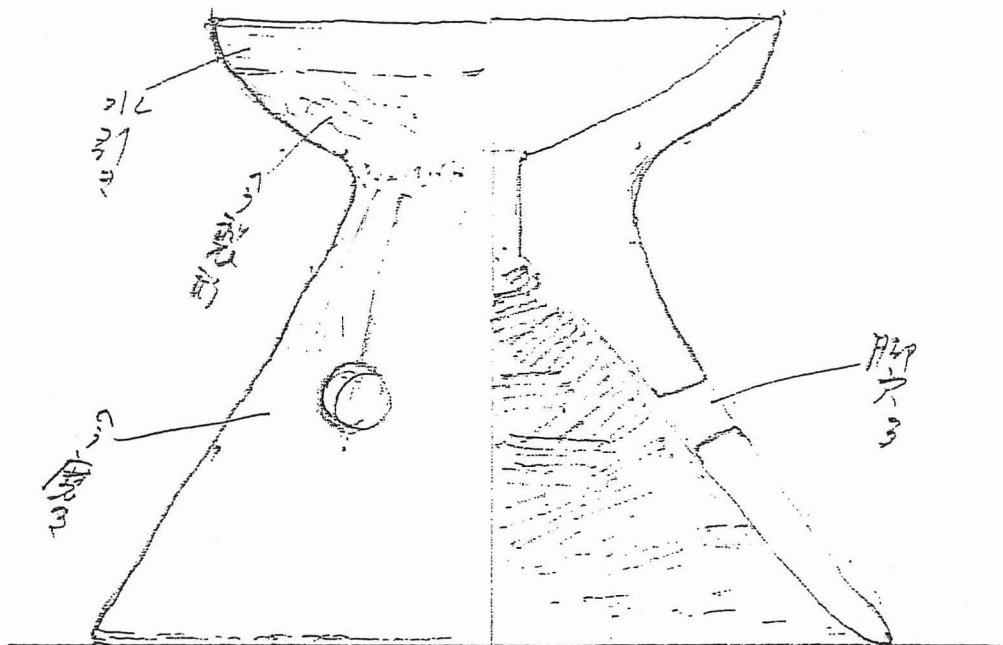
2. 記載資料の整理

〔遺跡及び遺物概要〕 遺物の出土地点は発掘調査の記録がなく、遺跡としての登録もない。また、保土ヶ谷区となっているが、1969年の分區で旭区に編入されており、ゴミ処理場の開場は1973年である。遺物はこの頃、千貝氏が個人的に収集したものであろう。それを赤星氏が見る機会を得、スケッチと聞き書きを残したと考えられる。なお、千貝氏とは横浜・野毛の居酒屋「凹凸」^{でこぼこ}主人・千貝幸之助氏のことである。当時、考古学の良き理解者であった氏の人柄を慕って、故岡本勇氏をはじめ、多くの県内史学関係者が店に参集していた。氏は2000年に物故されたが、所蔵の遺物・文献はすべて横浜市埋蔵文化財センターに寄贈された。

〔掲載図書〕 なし

〔掲載報告書概略〕 なし

(谷)



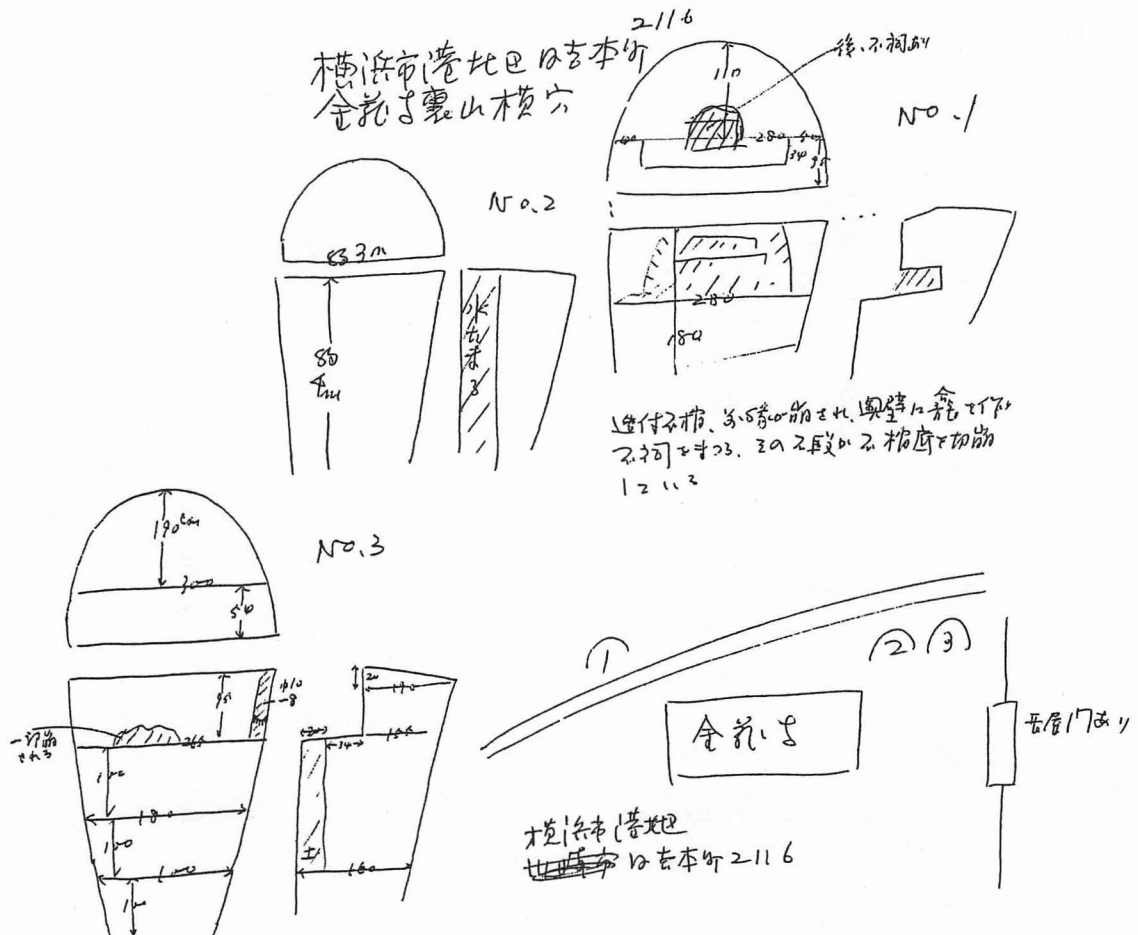
第8図 白根出土器台

年報番号 01174 港北区内横穴墓（金蔵寺裏山横穴・欠山横穴・矢上古墳北西横穴）横浜市港北区日吉町

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 横浜市港北区に所在する3ヶ所の横穴墓群についての記録であるが、その内容は概略図が主体のメモで、矢上古墳北西横穴については2枚のメモにそれぞれ昭和35年6月8日、昭和36年9月との記載がある。金蔵寺裏山横穴・欠山横穴の2ヶ所の横穴墓群には日付に関する記載は認められないが、昭和36年9月に矢上古墳北西横穴を実見した同じ日に、少し足を伸ばし現地を踏査したと推理するのが妥当であろう。

[記載内容概略] 金蔵寺裏山横穴・欠山横穴…それぞれB5大の藁半紙2枚の表裏に、青いボールペンで遺跡に至るまでの位置図と3基の横穴墓の概略図と計測値が記載されている。矢上古墳北西横穴…B5大の藁半紙2枚の表のみに青いボールペンで記載。1枚は昭35、6、8調と記され、遺跡の位置図と昭和17年に清水潤三氏が発掘調査した横穴墓2基に関する簡単な記録がメモされている。その内容は、「右穴 羨道 大甕 コハク玉 刀子」「左穴 羨門岩塊積」。もう1枚のメモには新井清君連絡、調査は慶大大学院風巻義章(?)君、昭36、9と記され、2基の横穴墓の概略図が描かれている。前者は横穴墓の勉強のため個人的備忘録として残したメモで、実際に現地を踏査した記録は、文献（清水1966）の日時から後者であることはほぼ間違いない。



第9図 金蔵寺裏山横穴の各横穴墓平断面概略図と位置

2. 記載資料の整理

[遺構概要]

金蔵寺裏山横穴…すでに開口していた3基の横穴墓を実見した記録と思われる。No.1は奥壁に接して造付石棺を有し、後世に奥壁に龕が掘り込まれ、造付石棺の一部を改変して祠として祭られているとのメモがある。玄室奥部分しか残存していないが、鶴見川流域では極めて珍しい造付石棺を有する横穴墓についての記録として極めて重要で、天井部の急な傾斜角度から考えて、

玄室と羨道の区分の明瞭でないタイプと推察される。No.2・3は、残された地図からNo.1からかなり距離を隔てて存在したようである。No.2は玄室が逆台形状を呈し、終末期のごく普遍的な横穴墓と考えられる。No.3は奥壁に接して棺座が設置され、これも終末期の様相を呈している。

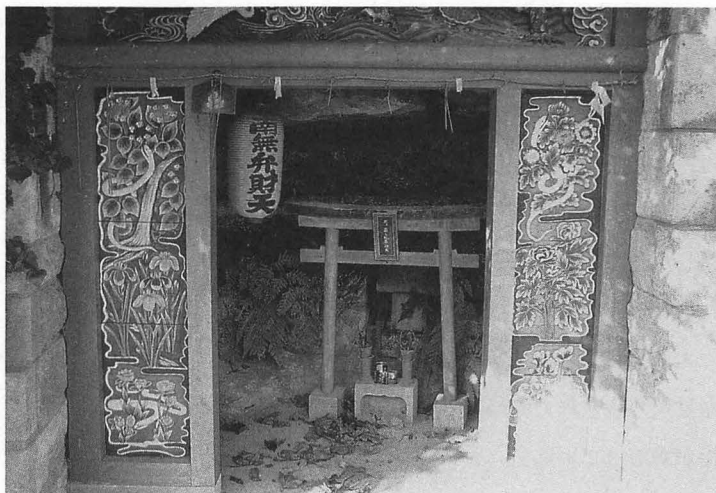
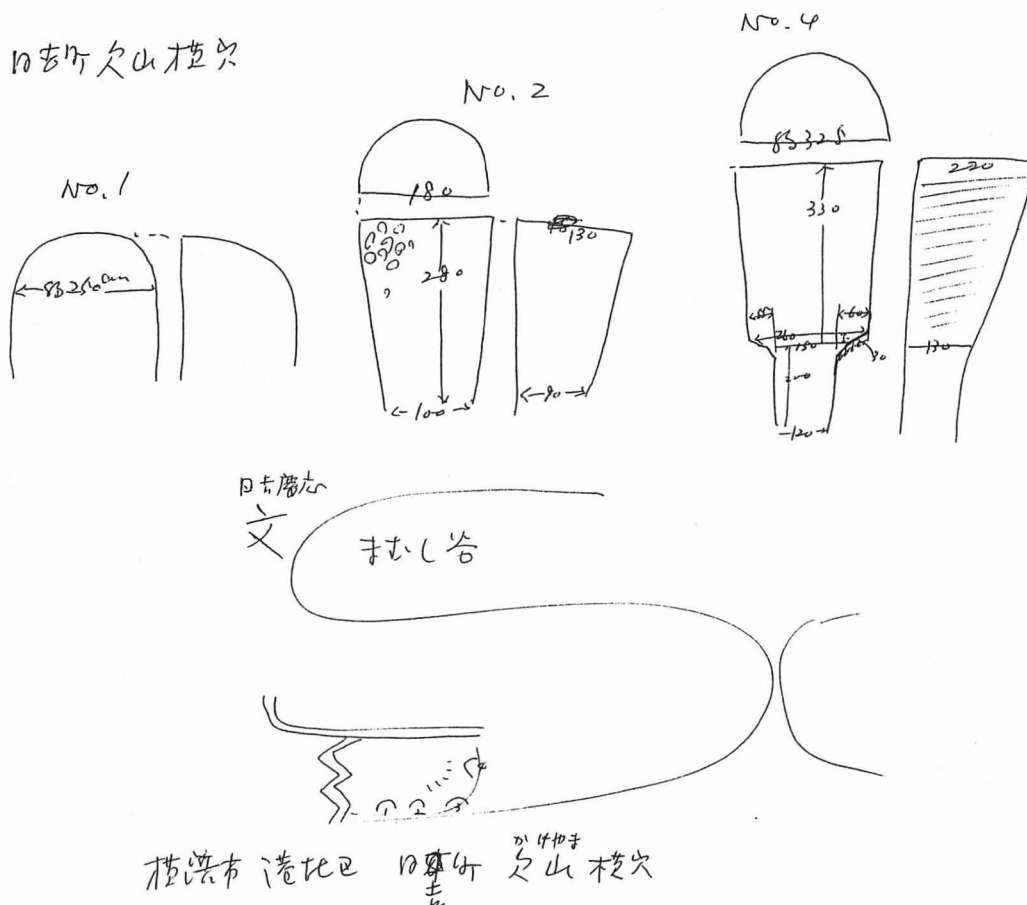


写真3 金蔵寺裏山No.1号横穴墓の現状



第10図 欠山横穴の各横穴墓断面概略図と位置

現地を訪れてみたが、No 1 の横穴墓しか確認することが出来なかった。金蔵寺裏の南面する崖の中腹に位置し、現在は弁財天の祠として仰々しく派手に祭られている。奥行きは赤星氏が実見した当時とさして変化がないと思われるが、天井部が広げられ、造付石棺の大部分は埋められたのであろうか、赤星氏の残された概略図とはかなり様相が異なっている。

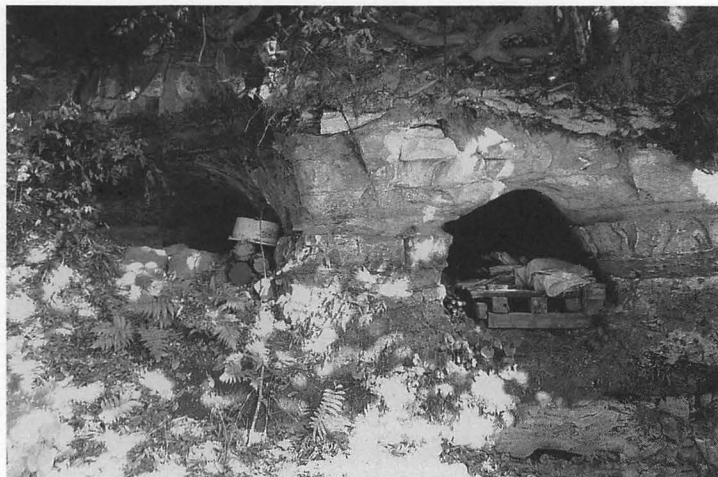


写真4 欠山No 1・2号横穴墓の現状

本横穴墓群は『神奈川県遺跡分布図』

並びに『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』の、横浜市港北区No57に該当する。

欠山横穴…慶應義塾大学日吉キャンパスの南方に位置する崖面で、4基の横穴墓の存在を確認したようである。No 1号は玄室の奥部のみのわずかな残存であるが、ドーム形天井を有することが大きな特徴で、古い時期の所産である様相を呈している。No 2号は玄室の大部分が残存し、逆台形状を呈する終末期に認められる普遍的な横穴墓。玄室左奥にまとまって礫が敷かれていた様子が示されている。No 3号は埋没との記載があり、存在は確認したが内部を観察出来なかったようで概略図はなし。No 4号は最も残存度が良好で、玄室と羨道の区分が明瞭で羽子板状の平面形を呈し、やや古い時期の所産である様相を示している。玄室側壁に肋骨状の整形痕が存在することを、赤星氏は忠実にスケッチに残している。なお、No 4号の概略図の右上に「明治年代に存在報告ある由」とメモが記されてされており、調査してみたが該当する文献は見あたらなかった。

慶應義塾大学の関連施設のある台地を南に下り、急な斜面が東海道新幹線の線路と交差する直前の斜面中腹に、小さな稲荷社が祭られている。現在横穴墓はこの神社境内の南西に面する崖下に存在する。踏査したが2基しか確認できなかった。この2基は赤星氏の示すところのNo 1・2の横穴墓に間違いなからう。2基は近接して存在し、赤星氏が実見した当時と大きな変化がないと思われるが、いずれも天井が若干崩落し、横穴墓前面がこれも若干崩れたようである。横穴墓内部は双方とも廃棄物が置かれており、中に入り観察することは出来なかった。周辺住民にとって、稲荷社は現在でも素朴な信仰の対象となりそれなりに護られているようであるが、横穴墓は防空壕の残骸かただの洞穴としか見られておらず、古墳時代の墓で文化財であるという認識はされていない。

本横穴墓群は『神奈川県遺跡分布図』並びに『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』の横浜市港北区No80に該当する。

矢上古墳北西横穴…発掘調査中に現地を訪れたと考えられる。この横穴墓に関しては清水潤三氏による文章だけのごく簡単な記録（清水1966）が残されているが、それによると斜面改修工事中発見され、昭和17（1942）年に同じ斜面に開口した横穴墓2基を調査した経緯から、昭和36年8月31日～9月6日まで発掘調査を実施したと記されている。なお、この際に調査した遺物と調査記録は、残念ながら戦災で全て失われたとのことである。

さて上述の清水氏の記録によると、No 1はやや不正の逆台形の平面を呈し、玄室の天井が奥壁から玄門に

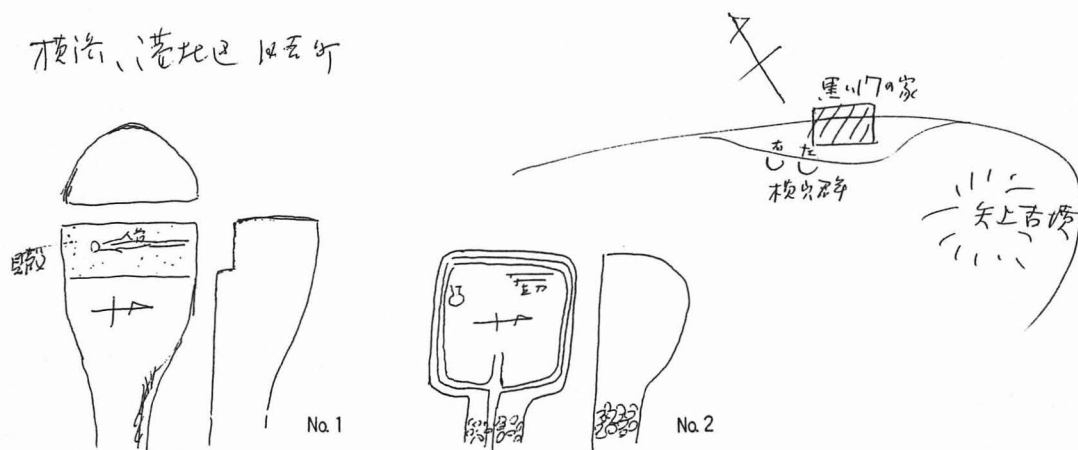
向けて急傾斜し、奥壁に接して横長の棺座が一段高く造り出され、ここに遺存状態が不良の2体分と思われる人骨片が検出された。No 2 はわずかに横長の正方形に近い玄室に、短い羨道を付し、玄室内には川原石が敷かれ、玄室の四隅から須恵器壺3、土師器壺1、直刀3、鉄鏃若干が出土したと記されている。

この調査の成果は未公開のまま今日に至っている。したがって現在遺構・遺物の詳細を知ることが出来ない。しかしながら、赤星氏の残された概略図により大まかな遺構の概要を把握することは可能である。概略図は概ね清水氏の述べていることと一致するが、唯一清水氏が触れていないことは、No 1 の棺座上に敷かれた貝殻である。周知のごとく貝床を有する横穴墓は極めて数が少なく、このことについて抜かりなく記録に留めた点はさすがに赤星氏である。ただ残念なことは、赤星氏ならば当然敷かれた貝の種類を識別していたであろうに、その点についてメモに記載を残さなかったことである。この点については今となっては知る術がない。また、No 2 の玄室天井がドーム形天井を呈する古いタイプの横穴墓であったことも、赤星氏の概略図が残っていなければ判明できなかった事実である。

この横穴墓群はその後、昭和58(1983)年にも調査が行われている(鈴木1984)。この調査では3基が対象となったが、内1基は上述のNo 1 と同一の横穴墓の再調査である。以上を簡単に整理すると、本横穴墓群は昭和17年に2基、同36年に2基、同58年に3基が調査され内1基は重複し、これまでに合計6基の横穴墓が調査されたこととなる。

本横穴墓群は『神奈川県遺跡分布図』並びに『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』の横浜市港北区No 8 矢上上ノ町横穴墓群(日吉横穴)に該当する。

横浜市港北区の慶應義塾大学日吉キャンパス周辺は、以前より横穴墓が多数存在する地域として知られている。しかしながらその多くが調査されることなく消滅し、記録として残っているものはごく限られている。そうした中での3ヶ所の横穴墓群の踏査記録は、数少ない当該地域の横穴墓の様相の一端を知る上で極めて貴重な情報として評価される。



第11図 矢上古墳北西横穴の各横穴墓平面概略図と位置

- [掲載図書] 広瀬治夫 1962「横浜市日吉264番地第1号2号墳」『アーケオロジー』27
 清水潤三 1966「神奈川県横浜市日吉横穴」『日本考古学年報』14
 鈴木重信 1984『横浜市港北区矢上上ノ町遺跡・矢上上ノ町横穴墓B支群発掘調査概報』横浜市教育委員会

(上田)

年報番号 01180 港北区若雷神社遺跡 横浜市港北区新吉田町

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

資料A、Bの土器の調査年月は不明。資料Dの土器は1975年11月5日に小島金之助氏より手紙と写真を受け取って確認したことがわかる。

[資料保管場所]

資料A、Bについては、三殿台考古館に保管されていることを示す書き込みが見える。

[記載内容概略]

A（第13図）「横浜市港北区若雷神社遺跡」と記された紙片で、「若雷」出土の土師器坏2点と、「若雷社」出土の弥生土器甕1点の実測図が記載されている。土師器坏の1点は高さが3.6cmで口径が11.0cmであり、もう1点は高さが4.7cmで口径が14.5cmであることがわかる。

B（第14図）「横浜市港北区新吉田町若雷出土」と記された土師器甕の実測図で「土師器（鬼高?）」の記載がある。また、「口径14.7、底径8.0、高サ16.2 胴16.5」とも書き込まれている。

C 資料A、Bの土師器3点を同縮尺で配置した図である。[掲載図書]②に掲載するためのものである。

D 「神奈川県内出土遺物所蔵者調査票」と書かれた台紙があり、その表面には小島金之助氏（神奈川県在住）より赤星氏宛てで、若雷神社裏で出土した「土師器」を復元したという内容の手紙を貼付してある。裏面にはその手紙で触れられていた土師器坏の写真が貼付されている（写真5）。なお、その「土師器」は高さが11cm、口径が13.5cmとの記載がある。

2. 記載資料の整理

[資料から見た遺跡の様相]

ここでは資料A、B、Cにみえる土師器の年代に関連して、その時代の若雷神社遺跡とその周辺地域の問題について考察してみたい。資料Dの土師器については、今回は資料の提示のみにとどめ後考を期したい。

〈遺跡の概要〉 若雷神社遺跡（1）は港北区新吉田町3445付近に展開していた古墳時代後期から奈良・平安時代におよぶ、まとまった集落遺跡であったと思われる。1971年には横浜市埋蔵文化財調査委員会の踏査があり、その際に、この遺跡の範囲から採集した遺物の9割が、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器片によって占められていたという。また、須恵器については、古墳時代後期のものが12片確認されたようである。資料A、Bに見える土師器は、時期的には7世紀中葉の典型的な例と考えられ、この時期に当遺跡ではかなりまとまった集落が展開していた可能性がある。

当遺跡は東北方の四ツ家方面に舌状に張り出す台地に所在し、標高は20mから25mを測る。遺跡の範囲は350m×100mと認識されていた。しかし、先述した1971年の踏査以前に、畑地の天地返しと住宅化の波などで大半が破壊されていたようである。したがって遺構等の資料は管見におよばない。当遺跡の東南方向には鶴見川の形成した沖積地が広がり、その先に北流していた鶴見川が東に流れを変える屈曲部がみえる。その屈曲部に張り出す低平な台地と向い合うことになるが、これが弥生時代のまとまった集落遺跡で、古墳時代後期にもそれがおよぶと考えられる牢尻台遺跡（2）である。

〈周辺の集落〉 続いて関連する集落としては、東西に走る谷を挟んだ北方にある中里遺跡（3）が注目される。この遺跡は弥生時代後期から古墳時代後期、奈良・平安時代まで継続する集落跡で、早瀬川南岸の台地上に立地する。古墳時代の竪穴建物跡は後期のものを含めて6棟検出されている。古墳時代後期の時点で

若雷神社遺跡の集落と併存していたことが推定されるが、調査範囲は遺跡の10%にも満たないものであった。そのほか古墳時代後期の遺跡は、新吉田地区においては、新吉田第51遺跡(4)をはじめとする数箇所遺物の散布が確認されるばかりであるが、横穴墓の分布などから集落の展開を十分に想定できる。

なお、当遺跡の東南端部にある若雷神社には平安時代前期の清和天皇の時代(858-876)に創建されたという伝承があるが、周辺には平安時代前期の集落が展開していたことを想定できるので、その伝承の信憑性や背景を検討することも必要であろう。

さらに周辺部を見てみると、同一丘陵上では南方の舌状台地上にある新羽大竹遺跡(5)が注目されよう。この遺跡からは古墳時代後期以降の竪穴建物24棟確認されており、このうちの7棟から古墳時代後期の、年代的には6世紀後半から7世紀初頭のものとして位置づけられる土器の一群が確認されている。そのほか縄文時代中期から平安時代の集落が展開する専念寺裏遺跡(6)、7世紀ごろの竪穴建物が検出されている折本西原遺跡(7)などが注意されるが、古墳時代後期の集落の様相を伝える遺跡はきわめて少ない。未調査で消滅した遺跡を勘案すると、まとまった集落群が台地上に形成されていた可能性があるが、集落が低地部に展開していた可能性も検討しなくてはならないだろう。

〈周辺の古墳・横穴墓〉 鶴見川水系は全国でも指折りの横穴墓の密集地域で、この新吉田町周辺についても同様である。若雷神社遺跡の東方には、途切れがちになって延びる台地の縁辺部があり、その南面する崖線には新吉田町四ツ家横穴墓群(8)、新吉田横穴墓群(9)などが続き、早濶川を越えて2km東方に進むと、まさに横穴墓の密集地帯である日吉台に到達する。その間、早濶川北岸で東北方から迫る台地には檜入横穴墓群(10)、高田町横穴墓群(11)などもある。一方、南に延びる崖線には常真寺裏(旧新田小学校)横穴墓群(12)、新羽杉山神社横穴墓群(13)、西方寺横穴墓群(14)などが確認できる。しかし、このように多くの横穴墓の存在が知られる地域であるが、調査された例は少なく、その性格については不明な部分も多い。

古墳については、若雷神社遺跡の台地にはその南縁部に数基あるようだが、分布が希薄な地域である。周辺部では高田(15)、日吉台、加瀬台、駒岡方面に後期の古墳群が確認できる。

[掲載図書]

①横浜市埋蔵文化財調査委員会編(1971)『昭和45年度 港北ニュータウン地域内文化財調査報告Ⅱ』

②神奈川県県民部県史編集室(1979)『神奈川県史』資料編20考古資料
[掲載図書概要]

①1971年に踏査された内容が、松村昌彦氏によってまとめられている。

②遺跡の概要と資料Cが掲載されている。(須藤)



第12図 若雷神社周辺の関連遺跡

年報番号 01284 和泉式土器 横浜市都筑区見花山35付近

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

とくに調査年月に関する記載等は認められないものの、実測(略測)図脇にある「横浜市港北区川和町二一三四番地出土」という記載より、川和町が港北区から緑区に分区(昭和44年10月)する以前の時期に資料調査が行われたことがわかる。

[資料保管場所]

「鎌倉市腰越一番地 渡辺貞恵氏蔵」

実測(略測)図脇には上記のような記載があり、昭和42年度版の『鎌倉市明細地図』によれば、腰越一番地は現在の住居表示による腰越三丁目14番地付近にあたる。同地図には、腰越三丁目14-24に「渡辺貞恵」(「貞恵」はおそらく赤星氏の誤記載)と見えることから、この人物が赤星氏の調査した資料の所蔵者であると考えられる。なお、『鎌倉市明細地図』の昭和45年度版では同地の居住者が変わっていることから、現在資料の行方等については不明である。

[記載内容概略]

「土器(土師器)実測(略測)図」(B5判2枚:第15図)

2点の土器について原寸(S=1/1)で実測(略測)図を作成している。なお、図中には断面及び外形ラインのほか数本の細かい波状線(断面及び外形ラインとはほぼ合致する)が見られることから、赤星氏が実測(略測)に際して土器の外形(器面)を鉛筆によりトレースした線ではないかと推測される。

2. 記載資料の整理

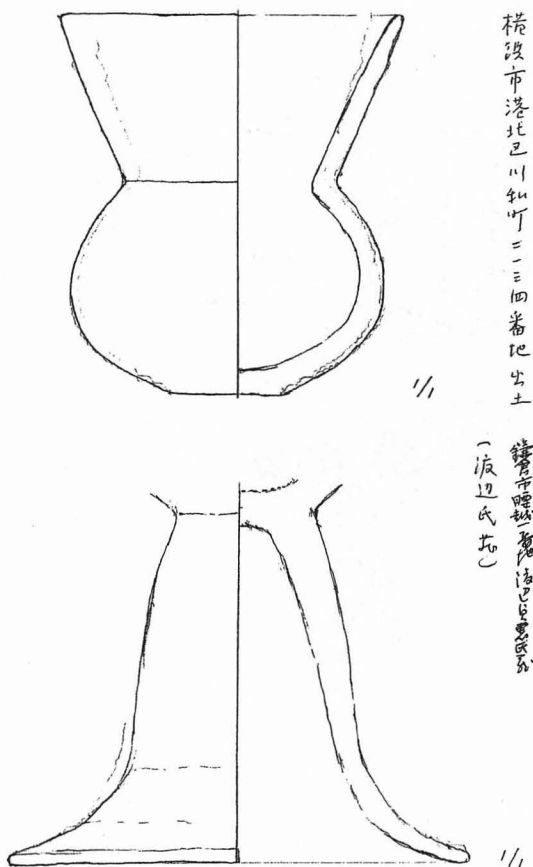
[遺跡・遺物の概要]

資料は、土師器の埴と高坏の2点である。

埴は、口縁部に最大径を有し、胴部～底部の方が口縁部よりも長くなる。底部は平底状となり、口縁部は頸部との境に明瞭な屈曲をもち直線的に開く。実測(略測)図から復元した各部の計測値は、口径(9.0cm)、頸部径(5.6cm)、胴部最大径(8.3cm)、底径(3.0cm)、器高(10.0cm)となる。現存率・調整等は不明。

高坏は、脚部のみ残存している。脚柱部は中位付近で膨らみをもち、裾部は外反する。坏部は接合部分が辛うじて残るものの、実測(略測)図では坏部内面が破線で表現されているため、大半は欠損しているものと推測される。実測(略測)図から復元した各部の計測値は、接合部径(3.7cm)、脚裾(脚端)部径(12.2cm)、脚部高(9.2cm)である。現存率・調整等は不明。

これらの土師器の出土位置は、「港北区川和町二一三四番地」と記されており、明細地図からすると現在



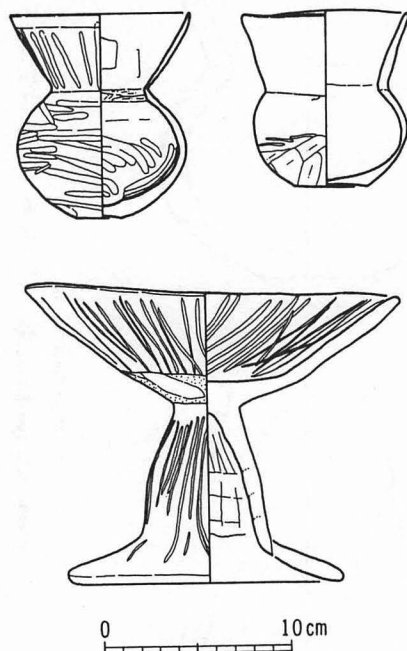
第15図 土師器 埴・高坏実測(略測)図(S=約1/2)



第16図 花見山遺跡と周辺の遺跡（『横浜市文化財地図』平成16年版：S=1/10,000）

XVI)。

それによれば、土師器の出土地点はB区とした場所に該当しており、ここからは同時期（古墳時代中期）の竪穴住居が1軒（B7号住居址）発見されている。遺構の残存状態があまり良好でないものの、貯蔵穴からは高坏・埴・埴・壺・甕が出土している（第17図）。さらに、花見山遺跡の南側に位置する「けんか山遺跡」（県Na：都筑区Na212、市Na：都筑区Na187）においても同時期の竪穴住居が発見されている（横浜市埋蔵文化財センター1990「けんか山遺跡（へ6）」『全遺跡調査概要』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X）ことから、おそらくこの付近に該期の集落が存在していたものと判断される。



第17図 花見山遺跡B7号住居址出土土器の一部（『花見山遺跡』より：S=1/4）

花見山遺跡の場所は、現在宅地と化しているが、調査の実施される前の昭和50年頃までは野菜・果樹の畑であったらしく、またB区の中央部は調査着手以前に土取りが行われていたようである。ここから、渡辺氏所蔵の資料は畑の耕作もしくは土取りによって出土したものと考えられ、あくまで実測（略測）図からの判断でしかないが、土器自体の残存率が高いことからすれば、これが後者の行為によって竪穴住居等が削り取られ、その残土中に混入していたものである可能性を推測させるのである。

但し、これらの土器が渡辺氏の所蔵となった経緯については、実測（略測）図のほかは何ら記録等が残されていないため、現在の資料の所在とともに明らかでない。

〔掲載図書〕

赤星氏の資料調査に関連する文献として、『神奈川県史』20（考古資料編）、『神奈川県史資料所在目録』（横浜市）、『神奈川県考古資料集成』3（土師式土器）があるが、いずれにおいても該当する記載は認められなかった。（近野）